

〔共同研究：中堅大学の学生に必要なリテラシー能力の研究Ⅱ〕

大学生の状況認識力の向上を目的とした ICレコーダ訓練の効果について*

辻 洋 一 郎

1. は じ め に

本稿の目的は、大学初年次生のコミュニケーション力を向上させる一手段として、ICレコーダ利用の有効性を調べ議論することにある。

大学生のコミュニケーション¹⁾能力の低下が指摘されている（岡本他，2012）。一方，社団法人日本経済団体連合会の調査によれば，大学新卒者に求める能力の第1位はこの10年間一貫して「コミュニケーション能力」が占めており，その率も年々増加の傾向にある²⁾。そしてそれに呼応するように，大学生対象の対人コミュニケーション能力の向上プログラムや取り組みが活発に行われている³⁾。対人コミュニケーションを円滑に保つためには，自己，他者を含む環境を的確に把握することがその基礎になる。本稿ではこの能力を「状況認識力」⁴⁾として，その獲得のためにICレコーダ活用の有効性を検討する。

ところで筆者のゼミでは，数年前からICレコーダを用いて発話・傾聴のトレーニングを試行し，これによってプレゼンテーションの力が著しく向上するとともに，周囲への注意力が短期間に向上することを確認している⁵⁾。このことから，初年次生の座学の授業でも，課題の選定や教授方法を工夫すれば状況認識力の向上が可能ではないかと推測された。

*本稿は，総合研究所共同プロジェクト「中堅大学の学生に必要なリテラシー能力の研究Ⅱ」（10共206）の研究成果である。

- 1) コミュニケーションの分類は対象によって対人・組織・異文化等に分かれる（日本コミュニケーション学会，2011）が，本稿でのコミュニケーションは対人に限定して進める。
- 2) 2012年度は82.6%で，2002年度の58.2%から年々漸増している。詳しくは日本経済団体連合会のホームページ（<http://www.keidanren.or.jp/policy/2012/058.html>）を参照のこと。
- 3) 例えば，2012年度の第5回社会人基礎力グランプリには88校102チームが参加しており，各大学では，この社会人基礎力を向上させる独自の事業やプログラムを実施している。社会人基礎力を構成する能力は，つまるところ問題解決能力と表現力・コミュニケーション能力に帰着すると思われる（高松，2010）。
- 4) 例えば，高井（2011）は，対人コミュニケーション能力を分類し，「状況認知能力」として，対自己対他者に係わらずコミュニケーションのための認知コンピテンスとして重要であるとしている。また，経済産業省の社会人基礎力では「自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する能力」として「状況把握力」と呼んでいる（詳細は，経済産業省ホームページ：<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>を参照願いたい）。いずれの能力も，自己-他者及び周辺環境への注意力が前提になる点で同じ能力を指していると考えられる。

キーワード：大学の初年次教育，状況認識力，コミュニケーション力，ICレコーダ，メタ認知

ICレコーダは主にビジネス現場で活用されているが、教育現場においても活用が検討され始めている。横山らは小学生の対話能力を向上させるため、インタビュー練習での活用事例を報告している（横山他，2009）。またICレコーダの活用方法をビデオ録画や研究授業と対比させて有効性を比較した高等学校での事例がある（ICレコーダー授業研修システム研究会，2010）。英語教育でも、対話力向上の観点からICレコーダが活用されている（吉田，2008）。大学生を対象にしたものは、就職活動の面接時にやり取りをICレコーダで録音し活用することが一般的になりつつある⁶⁾が、コミュニケーション力の向上に向けた活用事例は見当たらないように思われる⁷⁾。

本稿では、初年次生の状況認識力を向上させる目的でICレコーダを用いたトレーニングを試行し、その効果と向上に必要な要件を議論する。併せて、初年次生がこの能力を向上させてゆくステップについても議論する。

2. 研究の方法

2.1 受講者のバックグラウンド

本稿では、リメディアル科目の初年次学生43名を対象に行ったICレコーダ利用の試みを検討する。この科目は2008年度より開講しており、その目的は「高校までの教育とは大きく異なっている大学での修学に必要な知識・技能を強化すること」（本学履修要項2012年度版）である⁸⁾。数年間の授業の経験（辻，2010）、及び教員が初年次生に必要と考える項目（辻等，2010）を勘案した結果、現在は学習スキルとコミュニケーション力の向上を中心にカリキュラムを編成している。座学の授業ではあるが事例研究や質問を多用し、またワーク・ショップ等も取り入れている。

受講者は文科系学部（経済学部6名，社会学部11名，経営学部7名，法学部7名，国際教育学部12名）に所属している。入学制度別比率は推薦入試：一般入試＝61：39で、ほぼ全体比率に一致していることから、クラス構成は本学の平均的なレベルと考えられる。

2.2 録音データの採取

ICレコーダ（オリンパス社製：ボイストレック V-85）は一人1台宛準備した。受講者は

- 5) 正規のゼミとは別に補習時の課題の一つとして、例えば周囲の実況中継や自己PR等の就職面接を想定した質問に対する回答をICレコーダに録音して、聞き直すことを繰り返す試みを行っている。最初のうちは、普段目にする状況すら思ったように表現できない、自分が思っているほどアピールできていないことに愕然とする学生がほとんどである。しかし、録音を聞き直し、再度録音することを繰り返す作業によって注意力が向上し、いわゆる「空気を読める」ようになることを確認している。
- 6) キーワード「就職活動，ICレコーダ」でインターネット検索を行うと、面接を録音して有効活用する「備忘録代わり」の活用例が数多く見られる。
- 7) 対人コミュニケーション研究の現状については、大坊・宮原（2011）が詳しいが、ICレコーダの活用については触れられてはいない。
- 8) 詳細はシラバスを参照願いたい。（https://euphrates.andrew.ac.jp/public/web/User/MOM/Syllabus/MOMwebGakuseiSyllabusSansho/UI/MOMwebWSL_GakuseiSyllabusSansho.aspx?P1=2012&P2=1D06050001&P3=104004&P4=1D06050&P5=012012010100001）

毎回授業開始前に指定した機材を受け取り、終了時に返却する⁹⁾。授業終了後毎回、機材のUSB端末からパソコンにデータを取り込み、全授業終了後に録音内容の分析を行った。受講者には、①録音の冒頭に氏名を入れる、②録音したものは消去しない¹⁰⁾、③録音直後に再生して聞き直す、④出来るだけ録音・聞き直しを何度も繰り返す、④録音態度・姿勢は評価に反映させる、等を周知した。

2.3 課題内容と評価の基準

今回実施した課題は、参考資料1のように5つであるが、分析に供したのは次の課題1と課題2である¹¹⁾。

(1) 課題1

大学キャンパスの広場の様子を実況中継する課題である。聞き手を意識して、言うべき対象に焦点を合わせる力や構成力が問われる。何に着目して録音するかは受講者の自由とした。初回到トレーニングの意図と方法を説明し、併せて担当教員から見本を1度だけ示した¹²⁾。

録音したものは、①目の前の建物や事象等の状況を単に列挙するだけではなく、②場所や時刻・天候(背景情報)、及び③聞き手に伝えるという目的を意識して話せるかどうかをA、B、Cの3段階で評価した。

(2) 課題2

大学を初めて訪問する聞き手に、最寄り駅から大学までの道順を電話で伝える課題である(回答例は参考資料2を参照のこと)。大部分の受講者(43名中37名)が駅から徒歩通学しており、毎日この課題を意識して通学することを想定し、敢えて見本は提示しなかった¹³⁾。

課題2は、①目印になる建物・店舗等を必要十分に示し、②適切に方向指示を行い誘導で

9) 中央教育審議会における単位実質化の動きに鑑みると、レコーダを学期中貸与すれば課外の練習として最適かもしれない。しかし現実には難しいと思われる。例えば、前年度のリメディアル科目では課外練習を意図して、ICレコーダを春学期中貸与したが、結果的に課外に練習した受講者はほとんどいなかった。また、貸したままにすると肝心の授業時に携帯し忘れることが多く、継続的なトレーニングとデータ採取に支障を来たした。このため今回は、授業開始前に配布・授業後回収という手順を採った。

10) そのためノイズだけの録音や操作の手違いによる録音もあったが、すべての録音を聴取して不要と判断したものは除外した。尚、録音中に間違えて停止したため、ひとつの録音が複数ファイルになったものはひとつと見做した。

11) 課題1・2を取り上げた理由は2つある。ひとつは、状況認識力をみる課題としてはこの2つが、それぞれ俯瞰と焦点化の異なる側面での認識力をみる点で最適と考えたからである。次に、この2つの課題は本文中で論じる通り内容面の準備が不必要で、しかも前提条件が全員同じなので評価がし易いと考えられるからである。他の3つの課題を評価から除外した理由は3.6を参照願いたい。

12) 課題1は、初回に見本を示したので、このことが受講者の出来に影響したかもしれない。しかし1、2回目で大部分の受講者に模倣の跡が見られなかったことから、見本の提示は課題1が「実況中継の課題」との理解に寄与した程度と思われる。

13) 下宿もしくはオートバイ通学の6名は条件が異なるため、自宅から最寄り駅に変更する等の別課題を録音させた。本稿の集計にはこの6名は加えていない。

きているかを評価した。課題1と同様に評価は3段階とし、Aはほぼ問題なく聞き手を誘導できる内容であること、Bはある程度①と②は出来ているが総合的に誘導するには不十分である場合、Cはさらにレベルが低い場合とした。課題2は、「聞き手を誘導する」という目的を意識しながら、順路全体を俯瞰し、方向指示と目印提示を過不足なく、かつバランス良く伝えることが焦点となる。

3. 結 果

3.1 課題1

(1) 評定値の推移

課題1は、参考資料1のように合計7回に亘って行い、受講者別に録音内容を聴取し向上の度合いを分析した。結果は表1のように、最初から前置き・内容・発声等が十分なレベルにある受講者（A：5名）もいたが、半数以上（43名中27名）は発話自体が十分行えないようなレベルであった。しかしトレーニング7回目（授業14回目：最終回）には、28名がAとなった。評価が停滞した（初回の評定が最終回も同じ）受講者は8名（A3名、B2名、C3名）。評価が下がった者はいなかった。

課題1	初回	最終回
A	5	28
B	11	13
C	27	2
計	43	43

表1 ICレコーダトレーニングの結果：課題1

授業後のアンケートによれば、最初は慣れない作業を突然課せられた戸惑いや、一般学生からの視線に恥ずかしさを感じてうまく録音できなかったことが読み取れる。その一方で、初回からアドリブを入れる者や、落ち着いて周囲の様子を実況できている者も少数ながらいた。また、全員が同じ広場で録音しているためか、隣で録音している受講者の長所を取り入れて再録音した者もいるなど、受講者により対応に差があった。

(2) 定性的な所見

初回は不十分でも、回を追うごとに録音内容が進歩し最終的には十分なレベルに達した16名に注目して分析すると、いくつかの特徴が抽出できる。主なものを以下にまとめた。

- ① 言い切りが増える。初期はだらだらと重文で発話する受講者がほとんどであるが、回を追うごとに単文で言い切る傾向が見られる。
- ② 観察力が向上する。回を重ねるにつれて言及する対象が広がり、また同じ対象でも表現が豊かになる。

- ③ 前置きする例が増える。手当たり次第に目の前の対象を口にするのではなく、「今から校舎の配置を言います」等と前置きする例が見られた。事前に発言内容を構成していることを示唆すると考えられる。
- ④ 聞き手を意識する傾向がうかがえる。他の受講者は録音に気を取られたためか実況の目的を失念する者が多かったが、例えば末尾に「以上、〇〇がお伝えしました」と言い添える等、聞き手を意識した発話が16名中11名に認められた。

尚、16名は概ね5回目で向上にピークを打ち、6、7回目は5回目とそれほど大きく変わらないように見受けられた。

最後までCのまま進歩しなかった2名の録音内容は、共通して言い切りが出来ず、途中での沈黙も多かった。目の前の状況を場当たりの口にするのが精一杯の様子で、目的や聞き手への意識は感じられず、義務的な作業に終始していると思われる。

3.2 課題2

(1) 評定値の推移

最寄り駅から大学までの道案内を聞き手にするこの課題は、参考資料1のように授業3回目から連続して5回行い、課題1と同様に初回と最終回の録音を聴取しA～Cの評定値で向上の度合いを測定した。結果は表2のように、初回はほとんどの受講者はCであったが、課題2の最終回には半数以上の受講者がA（聞き手をほぼ間違いなく大学まで誘導できるレベル）になった。初回に比べて最終回で評定値が下がった者はおらず、わずかに3名がCに止まるだけであった。尚、このうち課題1でもCに留まっている者は1名である。

課題2	初回	最終回
A	0	22
B	1	12
C	36	3
計	37	37

表2 ICレコーダトレーニングの結果：課題2

課題2は駅からの道案内であるが、下宿生等、駅からの徒歩通学ではない者には別課題を課したので合計人数が課題1とは異なっている。詳細は本文を参照いただきたい。

(2) 成長のステップ

初期の共通点は、近視眼的な方向指示に終始し、その一方で店舗や建物などの目印の提示が少なく、かつ適切でないことである。トレーニングを重ねるごとに、徐々に目印が増え、それに伴い方向指示も正確さを増して来る。また初期は、開始からしばらくは必要以上に詳細な説明が続く反面、後半が雑になったり端折る傾向が見られるが、回を重ねるごとにバランスが取れるようになった。最終でA評価の受講者は、方向指示と目印の指摘が（粗さに多

少の振れはあるものの) 誘導するに足る録音内容であった。Bの受講者(12名)は、目印が恣意的である一方で方向指示が十分でなく、そのままでは聞き手を適切に導くには十分ではないレベルであった。

聞き手を誘導するという目的意識の出現も録音から確認できる。例えば、「駅の改札は1箇所」との指摘をしていたり、スロープの途中で大学が遠望できることやランドマークを言い添えている受講者もあり、これは誘導を意識し、聞き手に安心感を与える行為と考えられる。このような受講者は最終回には37名中15名を確認できた。そのうち12名は「道案内をする」等、前置きをしてから具体的な道案内を始めており、これも聞き手に対する配慮と見做せるだろう。

発話の仕方については、初回は単文で言い切る形で発話していた受講者は1名のみで、大部分は例えば「右にまがりい、次にまっすぐ行って左にい、まっすぐ行ってえ」というように重文を続ける傾向にあった。しかし、最終回には32名が単文で言い切る形に変化していた。課題2の実施回数は5回であったが、課題の特殊性もありまだ改善の余地がある受講者が散見されたことから、回数を増やした方がよかったかもしれない。この課題の最終回でCの受講者は3名であったが、うち1名は課題1でもCであり、この課題に対しても意欲が感じられなかった。他の2名は説明が途中で終わり、最後まで誘導できるレベルではなく、取り組み姿勢の問題と考えられる。

3.3 全体的な成長の動向

課題1と2を比較したのが図1と2である。図1は初め評定値が課題1・2ともにC(以下[C, C]と表記)の者が、最終的にどのように変化したかを表し、図2は最初に[C, B]もしくは[B, C]の場合の最終的な評定値を表している。いずれも評定値が変化しない1~2名を除き全般に向上していることが判る。但し、課題1と2では成長に差があるよ

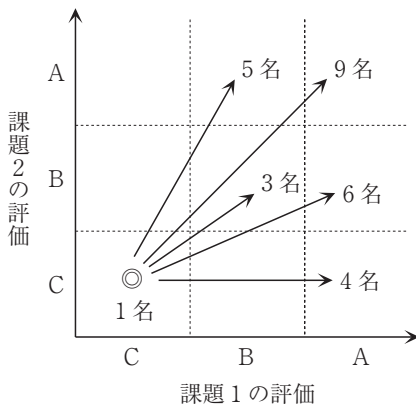


図1 受講者の最終スコア
(最初に[C, C]評価の場合)

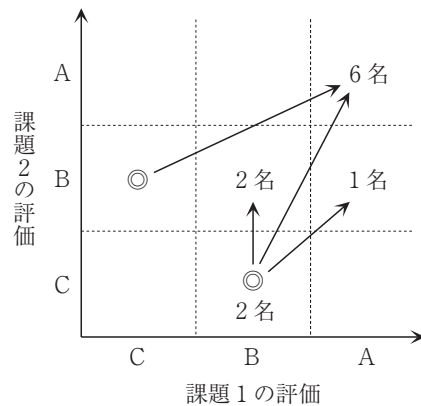


図2 受講者の最終スコア
(最初に[C, B]もしくは[B, C]評価の場合)

うに思われる。図1のように課題2は向上したが、課題1は依然変化がない受講者もいる。このことは課題1と2で別の能力を見ているということを裏付けているように思われる。

3.4 その他の特徴

(1) 成長の特徴

課題1の初期は、ほとんどの受講者が慣れない課題にとまどうとともに、目の前の出来事を列挙することに精一杯であった。しかし回を追うごとに余裕が生まれ、最終回には聞き手を意識する傾向が見られた。同じ受講者ごとに時系列的に録音を聴くと、①着目する対象は大きくは変わらないが、②前置き(目的)・天候・時刻等が付加される、③発話の内容が全体から細部へと順序が整えられる、④自分の感想等を言い添える等の特徴が見られた。録音し聞き直すトレーニングを重ねるにつれて、対象への認知と目的の認識が向上しているように思われる。

課題2では、最終の評定値がBの受講者の傾向として、前半は必要以上に細かく表現している反面、後半が雑になり途中で説明を端折るケースが散見された。この課題2は、過不足なく目印を選択しその間の方向を適切に指示するものであるが、全体を俯瞰する能力と最後まで誘導し通す根気・忍耐力が求められるようである。最終の評定値がAの受講者の録音を聴くと、回を重ねるごとに目印的確さが向上し方向指示が整うことに加え、全体のバランスを取る傾向がうかがえる。

(2) 受講者の感想

毎回、授業の最後に行ったアンケートの中からこのトレーニングに関する部分を参考資料3にまとめた。ここから、受講者の感情・様子の変化が読み取れる。ICレコーダを用いるのは全員初めてということもあり、最初は戸惑い・違和感・恥ずかしさ等を感じたことがうかがえる。しかし回を追うごとに録音への慣れや落ち着きが生まれ、徐々に手ごたえを感じていることが読み取れる。向上の必要性や自分なりの気づきや達成感を得た受講者も多い。

また、全授業終了後に、メールで一部の受講者から届いた感想を参考資料4にまとめた。回を追うごとに聞き手を意識することや、録音前に内容をまとめる重要性が自覚されていることが判る。

3.5 結果のまとめ

以上、ICレコーダを用いて行ったトレーニングの結果を概観した。課題1は、目の前の状況を捉える力が問われ、課題2では順路全体を俯瞰しながら目印と方向指示を過不足なく述べる力が要求される。ともに状況認識力が問われる課題である。結果から、トレーニングによって概ね受講者全体の状況認識力が向上し、併せて回を追うごとに録音内容に工夫や改善がみられることが判った。初期は初めて行うトレーニングに戸惑う受講者も少なくなかつ

たが、慣れるにつれて、聞き手に対する意識や向上心や気づきも生まれてくることが観察された。

3.6 補足一他の3つの課題について

今回、以上2つの課題に併せて、次の3つの課題も行った¹⁴⁾。「自分をモノや動物に例えると」(計3回)、「私がしているアルバイト／高校時代の部活動について」(計2回)、及び「私の趣味」(計1回、但し4回繰り返し)である。これらは課題1・2のような目の前の状況や経験したことを素直に列挙するタイプの課題とは異なり、材料(自分の長所やアルバイト、部活動や趣味等)を掘り起こし、かつその意味や価値を自分なりに認識(価値判断)するという比較的複雑な作業が要求される。実際、3課題の録音内容は個人差が大きく、かつ発話しながら考え込んだり、詰まったりする者が課題1・2よりも多かった。

今回は、こうした異なる2種類のタイプの課題を織り交ぜて実施した。最初は目の前の状況や経験したことを単純に把握することすら困難であったことを考えると、2つのタイプを織り交ぜて行うのではなく、まず課題1・2のような比較的単純な状況認識の課題を十分にトレーニングし、次のステップで内容や意味認識を必要とする課題に取り組ませる方が良いのかもしれない。

ところで、11回目のみ「私の趣味」という課題で録音・聴取・再録音を4回行わせた。多くの受講者は、繰り返すうちに、録音時間が延び、初回の情報に加えて思い思いに情報を付加していることが録音から読み取れる。例えば、「趣味はバスケットボール。高校時代からやっている」という単純な情報の列挙から、「なぜ好きなのか」「どのようなところが魅力的か」等が付加される傾向にあった。録音したものを聞き直すことによって、内容を深化させるような向上・改善の力が働いたものと考えられる。

4. 考 察

(1) ICレコーダ・トレーニングによるメタ認知の向上

今回の結果を見ると受講者の約80%の能力が向上しており、能力に伸びがなかった受講者はわずかであった。少なくとも、前向きに取り組んだ受講者にはこのトレーニングは有効であったと考えられる。

このトレーニングは、録音したものを聞き直して再度録音するという繰り返しをする。ここに単に発話させるだけのトレーニングやロールプレイ等との違いがあるように思われる。聞き直すことであたかも鏡に自分を映すように、第三者の視点から客観的に自分の発話を聞き、足りない点や改善点等に対する認識が向上する。「分かっているはず」という自己中心

14) これらは、就職活動の面接でよく質問される項目であるのみならず、コミュニケーションの能力を向上させる課題でもある。質問者(聞き手:面接官)の意図に気づく重要性を受講者に認識させ、聞き手の意図を踏まえた回答の重要性を理解することがコミュニケーションの能力を向上させることにつながると考え、ゼミでは毎年これらの課題を課し成果を上げている。

的感覚、「分かってもらえるはず」という期待感から脱却し、客観的に自己を見る契機となると考えられるのである。

自己を客観的に把握する能力は「メタ認知」(岡ノ谷, 2004; オリヴェリオ, 2006; 三宮, 2008)と呼ばれるが、これは自分の認知行動を正しく知る上で必要な心理的能力である。メタ認知を向上させるためには自己を振り返るモニタリングが有効である。モニタリングの手法としては、ビデオレコーダ等の活用が報告されている(例えば三宮・久坂, 2007)。ICレコーダもその一つであるが、他のメディアに比べて手軽さ、反復のし易さ、及び自主的な練習が可能である点で優位性が高いと思われる。横山ら(2009)は、小学生の国語の授業で行った「インタビュー名人になろう」の単元の取り組みでICレコーダを活用したが、この単元は質問や回答の内容に対する理解が必要となるため、今回除外した3つの課題と同様の複雑なプロセスを内包する。状況認識力向上のためには、まずはモニタリングに特化して状況認識力を問う課題1・2の方が望ましいと考えられる。

(2) 課題についての検討

課題1は状況の何に着眼して実況するかを、課題2は全体を俯瞰して必要十分の誘導をすることを意図して設定した。これら2つの課題の達成度が向上していたことから、このトレーニングで着眼点と俯瞰力を磨くことができると言えよう。アンケートの回答や感想をみると周囲への関心や気づきが向上していることから、状況認識力の向上には少なくともこれらの課題が有効であったと思われる。その他の3つの課題は内容が問われる。そのため事前にある程度準備されていなければトレーニング自体が無意味になる懸念があるように思われる。

課題1・2を比較すると、1回目がどちらもCであった24名について最終回での向上度合を比較した図1によれば、課題1で最終的にA評価の19名に比べて、課題2は13名であった。受講者にとっての難度が異なったようである。ある程度盛り込むべき内容が推測できる課題1よりも、俯瞰を求められる課題2のほうが難しかったことから、課題によって実施回数ややり方を変えるべきであろう。例えば道案内は、実際に自分が毎日通学しているルートであるため、今回は自然な気づきを期待して敢えて見本を示さなかった。しかし、適宜「目印を盛り込む」、「目印と次の目印の方向を意識する」や「聞き手への意識をもつ」等のアドバイスを行えば、早期に達成度が向上することが期待できると思われる。

(3) 受講者の成長パターン

トレーニングは、行えば行うほど能力が向上するというわけではないようである。本稿で検討した課題1では、真摯に取り組む受講者は概ね5回程度で工夫や改善が終わり、その後は現状維持に止まっているように思われる。この課題は、前置き・背景説明(日時、天候等)・主目的(対象とその状況、感想)・まとめの言葉等、着眼点が決まれば盛り込むべき内容はほぼ決まっている。状況認識力の点からは、トレーニング回数は受講者個別に最適値がある

ように思われるので、指導者は次回の授業までに達成度をモニターして別課題に移る必要があるかもしれない。

課題1とは異なり、課題2は目印や方向指示の設定に柔軟性があるので、それだけ受講者の状況認識や全体俯瞰の多様性が出やすいと考えられる。しかしそれにも係わらず、多くの受講者に共通する成長のパターンが見られた。初期は方向指示のみに終始する近視眼的な誘導であったが、次第に目印を織り込むようになり、全体がうまくバランスするようになる傾向が見られた。最初は録音することに精一杯で近視眼的であるが、次第に全体を俯瞰し目印を意識する姿勢が芽生える。一時的に不必要な目印も増えるが、回を重ねるごとに洗練される傾向がうかがえるのである。状況認識の成長の過程は、まず視野が広がり情報量が増えるが、誘導するという目的のために情報が選択されて最適な形に落ち着くのではないかと考えられる。とすればこの過程を踏まえれば、一層効果的な学習方法を設計することができるかもしれない。

(4) ICレコーダ活用に影響する要因について

ICレコーダの活用による状況認識力の向上を検討するのが本稿の目的であるが、このトレーニングの効果を検討する際に留意する点もある。

ひとつは、今回はリメディアル科目の授業内で行ったため、並行して行った学習スキルやコミュニケーションに関する課題の影響を受けている点である。併行して行った課題では、他者への意識や配慮を求める事例をもとに、深く対象を観察し考える課題を演習した。状況認識力の向上は単にICレコーダ・トレーニングだけの効果ではなく、これらも寄与している可能性があるのである。つまり、これらの課題を考えることが、結果的に上記4(2)の末尾で議論したアドバイスになっていたとも考えられる。この課題に関する効果は別に測定しているもので、具体的な内容とともに改めて別稿で議論するとともに、本稿のトレーニングとの関係にも言及する予定である。

次に、ICレコーダ・トレーニングで課題を繰り返し反復させた点である。厳密に言えば、繰り返し練習を併用していることになり、純粋にICレコーダの効果を見ているとは言えないかもしれない。しかし、ICレコーダを活用するためには慣れが必要であること、及びこのトレーニングを効果的にするためには繰り返しが前提で現実的には切り離せないと考えられるため、敢えて今回の形で実施した。

5. お わ り に

大学に入学してくる学生の多くは、総じて発話力や対人コミュニケーション力が低いのが現状である。その一方で、大学は4年後に社会で通用する人材育成を求められている。どのようにして学生の積極的な姿勢と行動力を育成するかが焦点であり、ここに近年、アクティブ・ラーニングの必要性が議論されている理由がある。本稿では、本学で行ったICレコー

ダの活用について報告と議論をしてきたが、受講者の感想として「手応えがだんだん出てきた」「自分で購入して活用してみたい」等の前向きな声も多く聞かれた。表現することと、それを客観的に確認し改善してゆく面白さや楽しさを体感することができたとすれば、大きな表現ではあるが、この試みは潜在的に備わっている表現力を解き放つ契機になると言えるかもしれない。

ICレコーダはビジネス現場等での備忘録的な使われ方が一般的であるが、教育現場ではより能動的な利用の可能性があるのである。一方で、課題も浮かび上がった。ICレコーダを用いるトレーニング向けの演習課題の設定や効果的な学習方法の探究を行うことで、コミュニケーション力向上のための新しい方法論の進化が期待できると思われる。

謝 辞

草稿に対してコメントを戴いた藤間 真先生（経済学部）、巖 圭介先生（社会学部）、及びデータの処理でお世話になった奥村 理恵氏に感謝します。

参考文献

- ICレコーダー授業研修システム研究会「デジタル録音機器を用いた簡便性を重視した授業研修システムの構築」『パナソニック教育財団実践研究助成報告書』35（2010）200-202.
- 岡ノ谷 一夫編『心理学辞典』丸善，2004.
- 岡本 隆，熊谷 太郎，曾我 亘由「大学生の多くは『人柄や粘り強さはすでに備わっているが、語学力やコミュニケーション力が足りない』と認識！：愛媛大学および松山大学における調査に基づいて」『IRC 調査月報』286（2012）30-35.
- オリヴェリオ・アルベルト『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』創元社，2005.
- 三宮 真智子編著『メタ認知 学習力を支える高次機能』北大路書房，2008.
- 三宮 真智子，久坂 哲也「人間の情報処理への理解を促す学習コンテンツの開発：承諾誘導技法を題材として」日本教育工学会論文誌 31（2007）41-50.
- 高井 次郎「対人コミュニケーション能力」『現代日本のコミュニケーション研究』日本コミュニケーション学会編，三修社（2011）47-55.
- 高松 克之「社会人基礎力について—社会が求めている力とは何か—」埼玉女子短期大学研究紀要 21（2010）379-408.
- 大坊 郁夫，宮原 哲「対人コミュニケーション・トレーニング」『現代日本のコミュニケーション研究』日本コミュニケーション学会編，三修社（2011）56-66.
- 辻 洋一郎「中堅文科系大学におけるリメディアル科目はどうあるべきか」『桃山学院大学総合研究所紀要』35（2010）31-52.
- 辻 洋一郎，藤間 真，巖 圭介「教員が大学初年次生に求める能力とは何か：教員意識調査を通じて」『桃山学院大学総合研究所紀要』36（2010）77-108.
- 日本コミュニケーション学会編『現代日本のコミュニケーション研究』三修社，2011.
- 横山 善彦，森山 潤，梅田 規誉「ICレコーダを用いたメタ認知的支援による対話能力の育成—小学校5年生国語科「インタビュー名人になろう」の実践事例」『学校教育学研究』21（2009）87-95.
- 吉田 三郎，「ICレコーダーを活用した英語グループ学習の効果—より活発な学習参加のために」『高専教育』31（2008）195-200.

参考資料1 トレーニング課題とその実施タイミング

- 第1回 ICレコーダの使い方／使用上の注意，実況中継①
- 第2回 自分をモノや動物に例えたら①，実況中継②
- 第3回 自分をモノや動物に例えたら②，道案内①
- 第4回 道案内②〔複数回〕
- 第5回 道案内③〔複数回〕
- 第6回 道案内④，実況中継③
- 第7回 道案内⑤，実況中継④，写真を提示し解説する①
- 第8回 (授業評価アンケート実施のため行わなかった)
- 第9回 自分をモノや動物に例えたら③，実況中継⑤
- 第10回 私がしているアルバイト／高校時代の部活動について①
- 第11回 私がしているアルバイト／高校時代の部活動について②
- 第12回 私の趣味〔複数回〕
- 第13回 実況中継⑥〔複数回〕
- 第14回 実況中継⑦〔複数回〕
- 第15回 (試験のため実施せず)

※ ○内は回数。複数回と表示した回は，数回練習する時間をとった。受講者によっては3～4回繰り返し練習した者もいた。

参考資料2 課題2の模範解答

(和泉中央駅プラットホームから本学までの道順)

今から桃山学院大学までの道順を説明します。改札は1階上のコンコースにあります。電車を降りたらエスカレータか階段で上に上り，改札を出てください。改札の目の前にはコンビニエンスストアがあり，その向こうに上へあがるエスカレータと階段があります。それを上がるとお菓子屋さんがあります。お菓子屋さんの角を左に曲がってアーケードの道を直進してください。ハンバーガー店，ケータイ・ショップ，眼科医院を通り過ぎるとアーケードが途切れて目の前に「和泉シティプラザ」と書かれたガラス張りの建物が現れ，茶色のコーヒーショップが右手に見えます。シティプラザの1階は通り抜けできるので，コーヒーショップの脇を抜けてまっすぐ進みます。突き抜けると左手にスロープ，その向こうに短いトンネルがあるのでそれをくぐり抜け，長いスロープを下り切ると階段があり目の前に信号がある交差点に出ます。信号は渡らず右に曲がるとカーブの道なりに進み，自転車屋，美容院，パン屋さんを通り過ぎて下さい。道を隔てて左手に「アカチャンホンポ」と書かれたビルが見えるでしょう。カーブが切れるあたりに辻川産業という会社の門があり電機店の看板が見えます。植込みに桃山学院大学の標識があるのでそれに従って脇の小道を右に曲がり直進して下さい。吊り橋を渡れば大学の門に到着します。以上です。

参考資料3 アンケートの抜粋 (ICレコーダ・トレーニングに触れた部分：尚，1回目は別のアンケートを行い，8回目はアンケートを行わなかった)

- 2回目
- ・アナウンスは難しい
 - ・まだ照れくさい
 - ・今日はたくさん入れた
 - ・録音は苦手
 - ・ちゃんとできた。前回よりも進歩した
 - ・技術は上がってきた
 - ・苦手

- ・少しは慣れた
 - ・全然言えない
 - ・恥ずかしい
 - ・途中で声が小さくなってきた
 - ・難しい
 - ・自分の声を聴くのは違和感
 - ・普段の会話とは違い、何を話してよいのかわからない
- 3回目
- ・録音はやっぱり難しい。えーっと、あーなんて
 - ・いつも見ている風景なのに改めて説明するととても難しい
 - ・もう少しハキハキと話せるようにしたい
 - ・途中で何を言っているのかわからなかった
 - ・道順は意外と難しい
 - ・もっと説明できるようにしたい
 - ・いつも通っている道なのに！
 - ・ぜんぜんできなかった
 - ・何を言っているのかわからなくなり、むちゃくちゃ
 - ・慣れない
 - ・少し噛んで、なかなかスムーズには言えない
 - ・抵抗が少なくなってきた
 - ・道案内は難しい
- 4回目
- ・道順の説明が難しい
 - ・慣れてきた 次はもっと上手に
 - ・聞き直して息遣いに注意していた
- 5回目
- ・難しかった。1回目のほうがうまくできた
 - ・前回よりも道案内の仕方のコツがつかめた
- 6回目
- ・だいぶ慣れてきた
 - ・難しい
 - ・1回目よりは慣れてきた
 - ・ポイントを言えるようになってきた
 - ・道案内はうまくなった
- 7回目
- ・うまくならない
 - ・授業ごとに言葉が上手になってきた
 - ・難しい
 - ・いつもよりはできた
 - ・スラスラ言えている気がする
 - ・自分にとっては課題のあることがたくさんあった
 - ・前よりできるようになった
- (8回目は実施せず)
- 9回目
- ・あまりできなかったが、写真のやつは2回目にはできた
 - ・楽しくなってきた
 - ・慣れてきた
 - ・今日はイマイチだった
- 10回目
- ・少しずつ慣れてきた
 - ・1回目抜けがあった。2回目ネガティブなところを伝えてしまった

- ・アルバイトのことを話すのは難しい
- ・いつもよりはできた。
- ・相手を意識することが大切
- ・聞き直して反省
- 11回目
 - ・今日の2回目のほうがハキハキできた
 - ・実際の面接でこんなにカミカミだったらどうしよう
- 12回目
 - ・録音は誰に伝えるかで内容が変わってしまう
 - ・うまくならない。
 - ・しゃべれるようになってきた
 - ・日々進歩
 - ・今日の4回目のはるかに良かった
 - ・もうちょっと自分の中では足りないという違和感がある
 - ・慣れたが説明がへた
 - ・言葉遣いを気にする
 - ・今日はスラスラ言えた
- 13回目
 - ・いつも以上に言えた！
 - ・見慣れた風景を説明しようという発想がないためか、次の言葉がでてこない
 - ・次の言葉につまる
 - ・3回やっても同じようなことしか言えない
 - ・5W1Hの意識に言及
 - ・アタマで考えてから言ってもうまく話せない
 - ・つまってしまったり、考えがまとまらず間が空いた
 - ・新たな実況中継が勉強になった
 - ・進歩がみられない。
- 14回目
 - ・うまくなった実感が無い
 - ・最初よりうまくなった
 - ・最初よりも話せるようになってきた
 - ・初めに比べるとすごく状況を詳しく言えている
 - ・前よりスラスラいえるようになった
 - ・1回目に比べれば全然スムーズに話せたという面ではよかったなと思った
 - ・この3カ月で少しは言えるようになった
 - ・スラスラ言えるが内容が薄いように感じる
 - ・つまりながらも、ようやく自分の納得のいく録音ができた
 - ・一番の出来だった
 - ・考える重要性に気づいた
 - ・最後まで難しかった
 - ・最初に比べると成長した

参考資料4 受講者の感想（括弧内は筆者の補足：漢字の間違い等；多少勘違いがある回答もあるが、原文通りに記載している）

1) 難しかったことはどんなことか。

(Iさん) 私が一番難しかったと思うところは、自分の言いたいことを言うだけではなくて相手が何を求めているのかを考えて答えないといけなかったことです。

(T君) ボイスレコーダーを使って、実況中継をしたり、「自分を動物に例えたとしたら」などをふ

きこんだこと。

- (Yさん) 自分の言葉で伝えることが難しかったです。頭のなかでは伝えたいことがわかっていても言葉にするとうまく伝えることができないが多かったです。
- (Tさん) 自分の言いたいことがありすぎて、何を優先して言うかが自分なりにまとめることができなかったところでした。
- (Y君) 最初に録音をした時は何をいえば良いのかわかりませんでした。それが、難しく思いました。
- (Mさん) 課題について、自分の立場として考えることです。冷静な判断をだすことです。
- (I'さん) 言うことを考えてから言っても、いざボイスレコーダーで録音するとまごまごするところ。

2) 最初、自分ができなかったことはどんなことか。

- (Iさん) 実況中継の時に見たものをそのまま言うこと。
- (T君) ボイスレコーダーでふきこんだり、メモの取り方などをしたこと。
- (Yさん) 最初は、本当に何もできなかったです。大学の実況をする課題でも全く伝えることが思い浮かばなかったです。
- (Tさん) 最初何を言ったらいいのか待たたく(全く)わかりませんでした。
- (Mさん) メモ取りや、ボイスレコーダーを使って簡潔(簡潔)に説明することです。
- (I'さん) 普段の自分のペースで話してしまうこと。録音したものを聞くと話す速度が早すぎたり声が小さかったりで聞き取りにくかったです。

3) 何回目くらいでうまくなったと感じたか

- (Iさん) 徐々に上達していくのを感じることができました。三回目ぐらいから言いたいことがスムーズに言えるようになりました。
- (T君) 何回目かわからないですが、7月に入ってからだんだんとうまくなったかなと感じました。
- (Yさん) 回数を重ねる度にうまくなったとはあまり感じなかったです。今週はできても、次の週はあんまりできなかったと感じたりいろいろでした。
- (Tさん) 自分では、あまりうまく話せるようになったという思いはありませんでした。
- (Y君) ぼくとしては最後2回前くらいからは少しは上達できたのではないかと思います。
- (Mさん) 3回目の授業やりから、周りの目を気にせず話せるようになりました。
- (I'さん) 10回目くらいです。

4) 結局うまくなったのか?

- (Iさん) 私はボイスレコーダーをやっていくうちにうまくなれたと思います。
- (T君) たぶんですがボイスレコーダーのときに、いつもよりも迷わずにうまく話せたのでうまくなったと思います。
- (Yさん) うまくなったと思います。どういうことを伝えればいいのか、誰に伝えているのか考えて話すというコツをつかんだ気がします。
- (Tさん) できればもっとスラスラと自分の言いたいことを言えるようになりたかったです。
- (Y君) 先生が聴かれてうまくなっていないと思うかもしれません。
- (Mさん) メモ取りです。相変わらずキーワードではなく文章で書いてしまいます。
- (I'さん) 思えなかったです。

5) やってみて、気が付いたこと感想(成長したことや出来るようになったことなど)

- (Iさん) ボイスレコーダーをやってみて思ったことは、あたりまえのことですが誰に話しているかを意識することが大切だと感じました。実況中継をするうちに見たものをそのまま言うことが

できるようになりました。また、自分の言いたいことをしっかり言えるようになりました。

(T君) コミュニケーションにもいろいろなやり方があり、とてもためになったと思いました。

(Yさん) 4でも考えて話すことによってすごく変わるんだなと思いました。

(Tさん) 自分の言いたいことが、いざとなったらスラスラと言えないことに気づくことができました。そのためにも、ボイスレコーダーを使って実況中継をすることはとても大切だと感じました。

(Y君) 何を言うのか、先に考える様になりました。

(Mさん) ボイスレコーダーで自分のことを物に例えることの難しさ・相手の要求していることを汲み取る技術が少しは上がったと思います。関節（簡潔？）に分かりやすく相手に伝えることがまだまだできていないので、これからそのことに重点を置いて話せるようになりたいです。

(I'さん) いつもは早口だけど、心持ち、ゆっくり話せるようになった気がします。

以 上

(2012年10月5日受理)

Effects of IC Recorder Training for Improving Capability to Grasp Situations

TSUJI Youichirou

The capability to grasp situations is one of foundation in comprehensive communication. To improve this capability for university freshmen, the author attempted the experimental class utilizing IC recorder. Students tried to do their live recording for several subjects: for example, live recording of their landscape or live condition in university campus, or showing the way the nearest station to the university, etc. They recorded it in IC recorder, played it back and checked it, and tried to broadcast it again. The author analyzed this recorded data to students' growth of capability, later. It showed that it seemed to be even difficult for many students to make utterance at the first time, most of them achieved adequate live recording like broadcast reporters at last. The author discussed effect of utilizing IC recorder to improve the capability to grasp situations, some problems to carry out in classes. Checkpoints to acquire capability to grasp situations for university freshmen are also discussed.